

棒高跳びの歴史

History of pole vault

1 K 0 3 B 0 6 2 - 0 木下剛

指導教員 主査 土屋 純 先生 副査 磯 繁雄 先生

はじめに

陸上競技というスポーツの中で、一際変わった種目である棒高跳び。棒高跳びという競技は、ポールと呼ばれる棒を使い、地面と水平に掲げられた横木を飛び越え、より高い横木を飛び越えられるかを競うスポーツである。この種目は、様々な技術要素をもった競技である。棒高跳は陸上競技種目の中で最も「完璧なり難い種目」と呼ばれている。

棒高跳びの起源は古く、紀元前 1829 年頃とも言われている。またイギリスでは産業革命期までの 16～18 世紀、防壁を跳び越える遊びや、運河・小川・溝・濠などの障害物を跳び越す実用術として「棒幅跳び」が数多く行われていた。しかしその後棒幅跳びは衰退し、棒高跳びが陸上競技種目として取り入れられていった。日本にも明治維新の際、訓練の一環として棒高跳びが取り入れられることとなった。

棒高跳びの記録の変遷は、ポールの材質の変遷とともにある。まず棒高跳が生まれ、競技として行なわれた初期の記録として、アメリカではホアマンが 2 メートル 44(1863 年)、カナダではラッセルが 2 メートル 87(1867 年)、そしてイギリスではホイラーが 3 メートル 05(1866 年)という記録を残している。この頃は木製のポールを使用していた。木製のポールでの最高記録はアメリカのサムゼが出した 3 メートル 78(1906 年)まで使用されていた。次に主流となったのは竹ポールである。竹ポール時代の最高記録は、1942 年にアメリカのワーマーダムが記録した 4 メートル 77 である。3 つめに使用されたポールは金属ポールである。しかし 1961 年のアメリカのデービスの 4 メートル 83 まで約 20 年間でわずか 6 センチメートルしか更新されなかった。そして今現在使われているグラスファイバーポール時代を迎える。1960 年代に普及し始め、今日の世界記録は 6 メートル 14 まで伸びてきた。

このように棒高跳びは、他の陸上競技種目とは違い、ポールという道具とともに記録が向上してきた。このポールの材質が変わってきたことによって、技術はどう変化してきたか、また記録はどのように変化してきたのか、また木、竹、金属、そしてグラスファイバーが棒高跳びになぜ使用されたか、材質のもつ特性を探っていくことで棒高跳びの歴史について論じることが本研究の目的である。

なお、研究方法は、いくつかのなどを元にそれぞれの材

質ごとにその材質の特徴や形状などを論じ、当時の新聞記事や同時代の雑誌記事、そして広告を元にその時代の技術や記録の変化を材質が変化していく要因となった出来事、要因等を含めて論じていく。

第一章 木ポール

棒高跳びは当初、イギリスで盛んに行なわれていた。その頃の技術として「木登り法」と呼ばれるものがある。その内容は、木ポールの先に鉄製の穂先をつけ、その穂先でポールを立てて木登りのようにポールを上り、ポールが倒れる頃にバーを飛び越すと言った跳び方であった。着地場所は平地であり、ポールも非常に破損しやすかった。

第二章 竹ポール～金属ポール

木に比べ竹は弾性に富み、しかも軽いので、助走時の腕への負担が少なく、突っ込みから踏切、空中動作に入る一連の動きが楽になるということで竹ポールが主流になってきた。記録も飛躍的に伸びた。棒高跳に適した竹は日本に生息している竹の種類であるということからか、この頃の日本人選手の活躍が著しい。しかし、第二次世界大戦の影響から日本製の竹ポールの輸入が難しくなり、その代用品として金属製ポールが生まれた。しかし竹から金属に変わっても記録はほとんど伸びることは無かった。

第三章 グラスファイバーポール

竹ポールは弾力性に優れているが、破損しやすいということから、竹を模倣して作ったグラスファイバーポールが台頭してきた。グラスファイバーをめぐる様々な論争を経て、現在の棒高跳びの技術、スタイルに至る。

まとめ

棒高跳びの記録の向上はポールの材質の変化と共に歩んできた。今後新しい材質が新記録を生み出す可能性は無限大だろう。しかし先人達は、ポールの材質を限界まで引き出してきた。グラスファイバーポールならばまだまだ記録を伸ばすことが可能である。材質の潜在能力を競技者の技術が上回ることができる選手が日本人選手からであることを期待したい。